

ビラ配りのおじさん —長谷川隆久さんのこと—

塩 田 勉

謹厳をもってなる言語学者小林英夫先生の講義は粛々と行なわれた。生徒はニキビが消えたばかりの大学院生、行儀よく先生の到着を待っていた。そこに浅黒く恰幅のよいおじさんがやってきてビラを配りはじめた。大学院生の待遇改善に関するビラだった。なんだ、このおじさんは？疑いのまなこがおじさんに集注する。配り終わるとおじさんは、席に陣取りアントワヌ・メイエの『ジェルマニック・コマン』を取り出した。社会人学生なんていなかった昔、なんだ、学生なの？ウソ！そう身じろぐ気配がさざ波のようにつたわった。幾日か後、語学教育研究所（語研）の助手となって出頭した私は、とたにおじさんが端座しているのを発見した。老成した風貌をもつ二十八歳の長谷川隆久だった。

語学教育研究所は、当時、「八丈島」にもたとえられ、上司に嫌われたスタッフの遠島先だった。雰囲気も悪く日本語教育や外国語教育を担当するスタッフも、通常教員としては認知されず、教務部付きサービス用員のように学内からは受けとられていた。そういう感覚で所長が選ばれたから、助手は、所長の引越しや艶剃りの世話、所外の採点に駆り出され、本務以外の雑用を当たり前のように仰せつかった。雑用をやらせるときは「小間使い」、外部に成果を見せるときだけ「研究者」扱いの助手で、週二十時間のノルマは反故同然、毎日のように働らかなければならなかった。しかし、研究業績がない、留学籍がない、という非難は「研究者」として受けなければならなかった。

助手の仕事は半端な量ではなかった。図書の発注、購入、原簿登録、カード取り、捺印、支払い、予算作成、決算報告、製本と修理、配架、遅延の催促、店卸しチェック、窓口業務など、司書が行なう作業の全域を、引き継ぎもサポートもなく丸投げされる。各世代の助手は自己流にさばき手抜きもせざるをえなかったから現場はカオスの極みに達していた。長谷川さんは、ゴミ捨て場のような図書室に明瞭な原則を導入し、マニュアルを作成、秩序回復の改革に乗り出そうとよびかけた。しかし、大整理を始めてみると土曜日もふくめ、毎日、十二時間労働におよぶことが判明した。一週間くらいと甘く見ていた作業は三カ月も続いた。三カ月の間に助手たちは、事務能力を飛躍的にのばし、トイレや電車、短い睡眠時間をぬってすばしっこく予習するノウハウを身につけた。

その最中も所長や教務部長から私用に駆り出され、本務を留守にすれば学部教員から苦情がきた。助手たちは宅急便の配達員さながら、足の踏み場もない狭い書庫で本の上げ下ろしを十二時間つづけた。力仕事と毎回二食分の弁当で腕が太くなる。七号館屋上のプレハブ図書室の夏は四十度をこすから、男性助手は短パンで半裸、巨大な豆腐やコロッケを近所でこたま仕入れ、釜場のような小屋で汗まみれになりながら食べてしのいだ。

当時、戦前からつづく丁稚奉公の助手制度を刷新し、助手が「小間使い」ではなく「研究者」であり、研究所はタコ部屋ではなく研究・教育機関である、と確信していたのが長谷川さんだった。持ち前の力量を発揮して年下の助手たちをまとめ、ユーモラスに説明、柔らかに説得し、やがて職員、副手、講師と、共鳴する者の輪を広げていった。組合の助手会にも働きかけて懇談会をひらき、語研助手の異常な労働条件を、広いコンテキストにおいてみんなの前に分かりやすくひろげて見せた。

例えば、法学部の助手たちに同僚をあわせ、彼らにはいっさい雑務がないことを認識させた。法学部助手には、若き奥島元総長や佐藤英善元理事、野村教授などがいて、みな晴れやかで希望に満ち何一つ不自由ない顔をしていた。他方、政経学部や文学部の助手たちは、虚ろで屈託にみちた顔をしている。待遇改善の署名を求めても先輩の元助手

や教授たちの顔色をうかがわなければ何ひとつできない隷属状態にあることが容易に見て取れた。組合組織率が低いのもこれらの学部で、学部の民度は助手たちの顔に現われていた。

助手の待遇もさることながら、身分がさらに下の副手は、差別を被った者が弱い副手の上に差別を再生産するため、いっそう非人間的な境遇に置かれていた。組合運動によって副手制度が廃止されるのはかなり後になるが、長谷川さんは、助手と副手の境界を職場で事実上なくすように働きかけ、仕事を公平に分担し、作業量や配分を透明にして一緒に仕事をしやすい環境を整えた。長谷川さんは、抑圧されている者の気分を的確に見ぬき、人の心を無理なく解放することが上手だった。

さらに彼は、学内助手の労働条件をつぶさに調べて比較し、組合の団体交渉で専門司書を要求しようと提案した。当時は、理事の匙加減ひとつで、教職員の賃金が上がり下がりした時代だったから、団体交渉で理事に直訴するには勇気が要った。しかし長谷川さんはたじろがなかった。みんなを励まし助手の労働条件の比較資料をつくりあげた。手書き資料は十四頁にのぼった。助手たちはそれを手に団交会場にのりこんだ。どれだけ重労働を課されているか、専門司書がどれだけ必要かを長谷川さんは堂々と訴えた。長谷川さんの後について私も訴えたが、意気地がなくて足が震えた。その前後から長谷川さんには転職するよう有形無形の圧力がかけられはじめた。指導教授を通してそれは露骨に行なわれた。私も首になるかと心配したが、長谷川さんは平気だった。

そのあと彼は、賛同者とともに教職員連絡会を所内に立ち上げ、全教職員の会議体をスタートさせた。助手や職員の業務をPERTによって分析し、意志疎通の円滑化と仕事の流れの透明化を共有するための勉強会もつくった。教職員がどのような仕事を、どのように行なっていくか分かり合うと、教職間の意地悪や張り合いは嘘のように消えた。

次に長谷川さんは、賛同者とともに専任研究員の連絡会も立ち上げた。研究所には、教授会にあたる会議体がなく、自治もなく、すべては管理委員会の支配下にあったから、この挙は反乱と見なされた。長谷川さんには遺憾なく圧力がかけられ、昇格の却下、紀要論文の不採用などの差別を受けた。長谷川さんは「若侍」と執行部から呼ばれよくよく嫌われた。しかし、連絡会議は議事録の承認をまめに行かないながら支持を広げ、やがて研究所運営に必要な事項はすべてそこで実質審議される習慣ができあがっていった。沈滞して受け身だった所員の雰囲気が見違えるほど活気づいていったことはいうまでもない。

折しも着任したばかりの中村浩三所長は、研究所に一定の自治権を与え、助手を雑務から解放する政策をためらいなく選んだ。司書が配属され、次世代の助手たちは、法学部の助手と同じ自由を享受できるようになった。同時に、新所長は、島流し先だった語研を、生き甲斐のもてる職場に変えよう、と就任演説でも呼びかけた。その一言で教職員の心は瞬時にして一つになり、がらりと職場の雰囲気が変わった。長谷川さんが辛抱強く追求してきた方向が、中村所長の英断に助けられ制度として実をむすぶ寸前まで進んだのである。非公式だった連絡会議は、専任研究会と改名され、議事録も定着化した。様々な委員会の議事録が公開され、所内の活動がよく見えるようになり、各自の職分の意味や位置づけが明瞭になった。専任研究委員会が正式な会議体となり、議事録が大学に認知されたのは、中村所長の後の辻村敏樹所長のときだったが、中村所長のもので、語研の事業は飛躍的に拡大し、常時、数千人の学生が参加する語学学習支援と多数の外国語教育、語学教育を点検・研究する共通の場となって独立した、とあってよい。

こうした努力は、助手や客員が平等に研究委員会（他学部の教授会）に参加する体制（70年ころ）、外国人教員採用のさいの公募制や契約書導入（81年ころ）、女性機関長の選出（97年）など、学内に先駆ける近代化の成果となって現れている。

その後、人望の厚かった長谷川さんは、教務主任と所長を連続して十四年務め、日本語部門との分離、組合をとおしての在外研究員制度の確立、大学史編纂、フランス語の治療クラス開講など、難しい課題を見事に解決した。長谷川さんは、世人が避けてとおる手柄にもならない雑務を進んでこなし、人が恩恵を受ける習慣や制度をいくつも案出した名所長となった。

長谷川さんは、佐藤輝夫という鬼のような先生に卒論の指導を受けた。鬼先生が長谷川さんの卒論を褒めた、という話は狭い文研科で漏れ聞いた。ジュリエット・グレコの通訳をしたときは日本人には珍しく格の正しいフランス語だ、と感謝された話も聞いた。研究所のソッシュールやフッサールの読書会における理解力も水際だった。先を見通す、広い掴み方に長谷川さんの特徴があった。スキーの腕はプロ級で、長年スキー教室の指導員をつとめてもい

る。ベトナム語もできることは後で知った。ピラ配りのおじさんが秀才だったことを後まで知らなかったのは、長谷川さんが謙虚な人だったからである。後に、フランス語教育界で知られる存在になっても、限りない包容力をもって、めんどろな調査や編集を引き受け、見事にやりおおせる大人として敬愛された。

長谷川さんは、いわば民衆の根性と知恵を合わせ持つ人だった。祖父のひとりには、むなっぼりの八（胸彫り）と呼ばれる流れ者だったことも偶然ではない。肉の薄い胸に彫るのは痛いから、いなせなあんちゃんでないで彫らせない。父上も裸一貫から会社を立ち上げ産をなした発明の人、母上は孤児から身を起こして技芸万端を身に付けた女性だった。お独りになられてからも財産管理や税務処理まで自力でこなし、ふるまってくださる料理は板前はだし、ご近所からも愛された肝っ玉おっかあだった。

長谷川さんは、行動でこう教えた。どんな人にも素晴らしい可能性があって、それを信じ切れば、隠れた才能があふれ出てくる。人々を信頼し、わけへだてなく接すれば、必ず、和が生まれ、大きな力を発揮してくれる、と。昔、長谷川さんの教え子たちを垣間見る機会があって感銘をうけたことがある。彼らは群をぬいて大人びており、生き生きした声と、ユーモアと精気にあふれていた。あの子の若者たちの、教養が内から射してくるような双眸は、長谷川さんの心ばえを映していたのか、と今にして思う。

(2005.12.30.)

長谷川 隆久 教授 略年譜

(生まれ)

1937年(昭和12年)5月1日東京都大森区に生まれる。国民学校時代の蒲田大空襲の際、火の粉降る中逃げた経験と、富山に面した漁村の寺に5ヶ月ほど集団(学童)疎開した経験がある。ひもじくて浜辺に漂着する海草を拾い食べる日々だった。

(学 歴)

昭和31年3月31日(1956年) 私立武蔵高等学校卒業
昭和35年3月31日(1960年) 早稲田大学第一文学部文学科仏文学専修卒業
昭和38年3月31日(1963年) 同大学大学院文学研究科フランス文学専攻修士課程修了
昭和41年3月31日(1966年) 同博士課程満期修了

昭和46年8月(1971年)から同48年8月(1973年) 在外研究員として滞仏
1998年3月1日～1999年3月12日 早大在外研究員としてブザンソン滞在

(職 歴)

昭和40年4月1日(1965年) 早稲田大学語学教育研究所助手
昭和44年4月1日(1969年) 同専任講師
昭和49年4月1日(1974年) 同助教授
昭和55年4月1日(1980年) 同教授
平成16年4月1日(2004年) 早稲田大学国際教養学部教授
非常勤講師歴
実践女子大学(期間不明)
明治大学(期間不明)
日本大学総合政策学部 平成9年(1997年)4月1日～平成10年3月末日

(学内役職歴)

昭和57年11月16日(1982年) 早稲田大学語学教育研究所教務主任就任
平成4年11月15日(1992年) 同退任
平成4年11月16日(1992年) 同研究所所長就任
平成8年11月15日(1996年) 同退任
早稲田大学商議員(期間不明)
平成6年7月1日(1994年) 早稲田大学評議員に就任
平成10年6月(1998年) 同退任

(学 会)

(就任年月不明) 日本フランス語フランス文学会語学教育委員
平成4年6月7日(1992年) 日本フランス語フランス文学会語学教育委員会委員長に就任
平成8年6月2日(1996年) 同委員長退任

業 績

論 文

- 「ラング・パロール調査研究---第一次報告---」(共同執筆, 塩田勉)(早大語学教育研究所発行 ILTNEWS第48号, 1972年(昭和47)8月)
- 「フランス語の冠詞をめぐって」1972年3月早大語学教育研究所発行「講座日本語教育第8分冊」
- 「C. R. E. D. I. F.の語学教育思想の研究の意義と展望」(早大語学教育研究所発行 ILTNEWS第61号, 1976年(昭和51))
- 「“Français élémentaire”に関する論争の問題点と“Français élémentaire”の性格」1977年3月(昭和52), 早大語学教育研究所発行「紀要15」
- 「ミシエアの言語観と基礎語彙選定における統計の意味」1978年9月(昭和53) 早大語学教育研究所発行「紀要17」
- 「語学教育における語彙制限の意味…C. Cフリーズの語学教育観…」1980(昭和55) 早大語学教育研究所発行「紀要20」
- 「わが国におけるミシガン・メソッドの受容の一面面……山家保を中心として」1982年3月(昭和52) 早大語学教育研究所発行「語学教育論集1」
- 「高等教育の中で外国語教育をどのように位置づけるべきか…外国語教育の若干の問題点…」1987年3月(昭和62) 早大語学教育研究所発行「語学教育論集2」
- 「外国語教育のあり方を考えるために戦後教育改革の意味を考えてみる」1988年3月(昭和63) 早大語学教育研究所発行「語学教育論集3」
- 「語学教育の現場における翻訳の役割…講読授業を中心に…」1989年3月(平成1) 早大語学教育研究所発行「語学教育論集4」
- 「外国語教育をとりまく状況と外国語教育の課題」1991年3月(平成3) 早大語学教育研究所発行「語学教育論集6」
- 「外国語教育の一つの問題…学習のプロセスをどのようにとらえるべきか…」1993年3月, 早大語学教育研究所発行「30周年記念論文集」
- 「フランス語教科教育法は何を基礎にして構築できるか」1993年(平成5)3月, 早大語学教育研究所発行「語学教育論集8」
- 「外国語学習におけるアナログ的蓄積の大事さ…教室外学習環境(メディアセンター)の整備の必要性」1995年3月(平成7) 早大語学教育研究所発行「語研フォーラム」第2号

共同研究

- 「特集 語学教育に関する学生の意識調査---パイロット調査結果報告」1992年3月(平成4) 早大語学教育研究所発行「語学教育論集7」
- 「特集 語学教育に関する学生の意識調査---本調査結果報告」1994年3月(平成6) 早大語学教育研究所発行「語学教育論集9」

発 表

- 「外国語センター, 外国語教育研究所等のあり方と問題点」1990年(平成2)11月25日, 第4回フランス語教授法研究会(於東京日仏学院) 獨協大学「外国語教育研究」(第10号, 1991年9月)

授業報告

- 「テキスト講読授業の問題点---フランス語演習講座報告」(早大語学教育研究所発行 ILTNEWS第44号, 1971年(昭和46))
- 「速読授業(フランス語)について」(早大語学教育研究所発行 ILTNEWS第74号, 1983年(昭和56)10月)
- 「読みの授業について---語研『外国語講座』フランス語初級速読の授業報告」(早大語学教育研究所発行「語研フォーラム」第6号, 1997年3月)

解 説

共同執筆「フランス語入門講座」(伊東英編集, 小島慶一, 徳田陽彦) 1983年5月~1984年3月, 「基礎フランス語」13巻1号~11号, 三修社

共同執筆「フランス語入門講座」(伊東英編集, 柳谷巖) 1984年5月~1985年3月, 「基礎フランス語」三修社

教 材

共著「フランス語初級会話テキストアンヌの日本旅行」1978年11月, 早大語学教育研究所

共著「フランス語文法教室」1983年3月(昭和56), 第三書房(会津洋)

翻 訳

論文翻訳ヴァンサン・ラヴェリ「マルサス主義と生態学」1974年(昭和49) 汐文社発行唯物論n. 2

随 筆

「ニヤットさんの思い出」(早大語学教育研究所発行ILTNEWS第77号, 1985年(昭和58))

「語研と私と研究」(早大語学教育研究所発行ILTNEWS第30号, 1965年(昭和40))

「ブザンソン---レジスタンス博物館と一冊のノート」1996年3月(平成8) 早大語学教育研究所発行「語研フォーラム」第4号

「人種差別?」1999年3月(平成11) 早大語学教育研究所発行「語研フォーラム」第10号

海外雑誌論文要約

Paul GARDE: Accentuation et morphologie (早大語学教育研究所発行ILTNEWS第30号, 1965年(昭和40))

F. DEBYSER: 外国語教育と外国の文明 (早大語学教育研究所発行ILTNEWS第34・35号, 1967年(昭和42))

そ の 他

「第13回全私懇助手分散会報告」(早稲田大学教員組合ニュース, 1967年(昭和42))

「第15回全私懇に参加して, 私学の教育・研究の危機の深刻さを痛感する」(早稲田大学教員組合ニュース, 1969年(昭和44))

「私立大学の助手の待遇問題について」(早稲田大学教員組合ニュースNo.101, 1969年5月21日)

「『若い科学者の待遇に関するシンポジウム』に参加して」(早稲田大学教員組合ニュースNo.101, 1969年5月21日)

「総長選挙問題に関する組合のとらえ方についての私見」(早稲田大学教員組合ニュースNo.105, 1970年8月14日)

「パリ大学フランス文明講座受講報告」1973年3月(昭和48) 早大語学教育研究所10周年記念論文集

「語学教育研究所のあり方について---あり方に関する管理委員会の決定の意義---」1990年3月(平成2) 早大語学教育研究所発行「語学教育論集5」

「第4回フランス語教育に関する調査---集計報告」1991年5月(平成3) 日本フランス語フランス文学会(担当委員会の委員として調査, 集計, 報告書作成に参加)

「第5回フランス語教育に関する調査---集計報告」1997年5月(平成9) 日本フランス語フランス文学会(1996年5月まで担当委員会の委員長として準備作業に参加)

共著「語学教育研究所三〇周年史」1992年10月(平成4) 早大語学教育研究所

「伊東先生と語研と私」1994年8月(平成6)『伊東英さんを偲ぶ』文集刊行会「伊東英さんを偲ぶ」所収

「語研フォーラム創刊に際して」1994年10月(平成6) 早大語学教育研究所発行「語研フォーラム」1号

「語研の過去・現在・未来」1996年7月(平成8) 早稲田大学出版部発行「早稲田フォーラム No.73---大学問題論叢集73特集大学院・研究所の改革」

「所長退任にあたって」1996年(平成8) 早大語学教育研究所「語学教育研究所所報」No.7

長谷川隆久 教授 略年譜

「組合事務所は木造小屋でした」(「教員組合結成40周年記念誌---<随想>わたしと組合, そして期待」早稲田大学教員組合2001年7月(平成13))

「ウインタースポーツシーズン到来…」(教職員スキークラブ紹介, 2004年12月10日付け「れいんぼう」(早稲田大学生協ニュース教職員版))